
死者の復讐

奈森さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者の復讐

【コード】

N2108Q

【作者名】

奈森さくら

【あらすじ】

ある日、新一の元を訪ねて来た一人の女性。その女性はその後行方不明に。そして更に、東京湾から……。

プロローグ（前書き）

前回途中で断念した作品のやり直し投稿です。

プロローグ

東京・新宿にあるクラブ「蝶々」は新宿に軒を連ねるクラブの中では比較的料金が安い店である。多少の値段はするのだが、それでも他の一流所に比べれば充分過ぎる程にお手軽だ。そのせいもあってか、店を訪れる客には懐中乏しい人物が多く見られる。「蝶々」はいわばそんな人の為にあるようなものであった。

沢村瑛子は、そんな「蝶々」でホステスとして働き始めて一年になる女で今年二十一。源氏名は「花」という。彼女は「蝶々」でも一、二を争う人気ホステスでカンバン間近の午後十一時になっても、彼女を口説き落とそうとする客が残っていた。

「花ちゃん、一回だけでいいからさ〜」

五十を廻っているであろう男が隣に座る「花」に口説き文句を浴びせる。いや、最早口説き文句ではなくただのお願いだ。男はほんの二週間前にふらりと店に立ち寄り、値段の安さ、そしてホステスとして働く女の子達がなかなかの美人揃いという事に惚れ込み、以後ほぼ毎日の様に店を訪れていた。「花」が初めて男と話したのは一週間前。それ以来、毎回「花」を自分の席に呼び寄せては口説き落とそうとしている。しかし、「花」が男の誘いを受けた事は一度も無かった。いや、その男に限らず「花」は客からの誘いを何度受けても一度も首を縦に振った事が無いのだ。身持ちが固い、と言えばそれまでだがそこまで頑なになるには何か理由があるんじゃないかという思いも周囲の人物にはあった。

「花ちゃん、あなたまたお客さんのお誘い断ったんですって？」

帰り支度を進めている時ママがそう言った。ママは今年四十になる人で大人の色気を持ち合わせた女性である。

「別に無理に誘いを受けるとは言わないけど、あんまり突っぱねてばかりだと、お客さん離れていっちゃうわよ？」

「……………はい」

「花」はママが自分を気遣ってそんな事を言っているのはよくわかっていた。もしお客が離れてしまえば「花」はこの店を辞めるしなくなる。出来るだけ早くお金を貯めたいという「花」に今の仕事を紹介してくれたママであるから、そんな事にならないようにという、いわば親心からの言葉だった。

「まあ、ちよつとはそういう事も考えないといけないって事よ。じやあ、また明日ね？」

ママが去った後「花」は素早く着替えを済ませ店を出た。

店を出た後は大通りに向かい、タクシーを拾う。駅までは少々距離がある為瑛子は何時もタクシーを利用してはいた。

タクシーを待っている時向かいの通りに見覚えのある顔を二つ見つけた。それはほんの数十分前まで自分を口説き落とそうと必死になっていた男と、瑛子の同僚である「光」であった。「光」の腕は男の腕にしっかりと絡められている。

(……………)

瑛子は視線の先に二人を捉えながら、こちらに向かってくるタクシーに対して手を挙げた。

第1話：依頼人

「工藤探偵事務所」は米花町一丁目、米花駅前にあるビルの中に事務所を構えている。駅の出口を一步出ると探偵事務所の看板が目に入る様になっており近隣の人間だけでなく遠来の客も多く訪れていた。

工藤新一はそんな探偵事務所の所長を勤める私立探偵で今年二十歳になる。かつて高校生探偵と騒がれた少年は三年前のある日忽然と姿を消し、失踪から一年程経った頃また忽然と姿を現した。世間は彼の空白の一年に何があったのかを知らない。いや知る由がないのだ。当の本人はおるか、警察関係者も口を真一文字に結び何も語るうとはせず、やがてマスコミ側が根負けし、今ではその事は忘れ去られたといっても過言でなかった。

工藤新一が私立探偵として活動を始めてから一番マスコミが驚いた事といえば彼が取材やメディア露出を極端に嫌うようになったという事だろう。以前は積極的に取材に応じていた彼が、失踪から復活してからというもの一切その活動を露見させず、町の小さなビルの中にある探偵事務所を営んでいるという現状は世間一般に少々信じがたく、尚且つ勿体無いという思いを持たせる結果となっている。何故、彼が突如としてメディア露出を拒み始めたのか、その理由は誰にもわからず想像もつかない。彼に何があったのか。しかし、そんな思いも時が経つにつれて人々の中から消え失せていったのである。

十月七日、この日は土曜日で探偵事務所は何時もより一時間遅い午前十時からの営業開始であった。この日、事前予約が入っている依頼人は居ない。新一は数日前に依頼されていた浮気調査の報告書を書いていた。

コンコンと事務所の扉がノックされる音に反応してペンを持つ右手が動きを止め、報告書に注がれていた視線は入り口付近に向けられた。

「はい」

ペンを置いて報告書を机の引き出しにしまつと新一は椅子から腰を上げた。扉を開けたそこには一人の若い女性が立っていた。二十代前半、新一と年格好はさほどかわらないと思われる。

「あつ、あの。突然申し訳ないんですが、依頼を……。構いませんか？」

「ええ、構いませんよ。中にどうぞ」

新一は手際良く珈琲を用意すると女性の前に置いた。女性は黒の髪を後ろで一つ括りにして、清楚な雰囲気を感じ取れる。服装もどちらかといえば地味な服装だ。女性は新一が前に腰掛けるのを見届けてから口を開いた。

「……私、沢村瑛子といいます。実は私、今誰かに命を狙われているかもしれないんです」

そのあまりに唐突な発言に新一は一瞬反応が遅れた。それもそうだろう、彼女を見る限り命を狙われているなどという考えには決して辿り着かない、いわば彼女のイメージとは正反対の言葉だったからだ。しかし真剣な表情をしている彼女に、冗談などではないという雰囲気を感じ取った新一は、瑛子に何故そう思うのか、そのきっかけを順序立てて説明するように頼んだ。

「……最初は二週間程前、仕事からの帰りに、家の前の道で突然私の前に植木鉢が落ちてきたんです。幸い私には間一髪当たらなくてその時は誰かが誤って落としてしまったんだろうっていう風にしか思わなかったんですが、それから信号待ちの時に誰かに背中を押されたり、駅で階段から突き落とされそうになったり、そんな事がほぼ毎日続いて……、私、段々怖くなってきて。警察に行こうと思っただんですけど、誰かに命を狙われる理由なんて思い付かないし、もしかしたら私の勘違いかもしれないって思っただけ。それで、警察の方とも繋がりがあっていう工藤さんなら、上手く調べてくれるんじゃないかと……」

「……成る程。つまり、自分が本当に命を狙われているのかを僕に調べてほしいという訳ですね」

「はい。お願いできますか？」

「ええ、お引き受けしますよ。ただし、もし本当にあなたが命を狙われているとわかった場合はすぐに警察へ行して下さい。僕の知り合いに優秀な刑事がいますから、その人に言えばきつと力になってくれる筈です。とりあえず、今日から三日間は調査期間として僕があなたの護衛につきます。どこかにお出掛けになる時は、必ず僕に連絡を入れて下さい。間違っても一人では出歩かないように」

「……はい」

「それから、普段はお仕事をされてるんでしょうか？」

「はい。新宿のクラブで働いています」

「勤務時間は？」

「店の営業は午後六時から十一時までで、私は五時頃に店に入って十二時前に店を出ます」

「今日もお仕事は？」

「はい、あります。何時も四時過ぎには家を出ますけど」

「わかりました。では、その時間にお迎えにあがりますので。帰宅時も、僕がお供します」

「わかりました。お願いします」

「では、こちらの書類にお名前とご住所を」

新一が差し出した書類の空白を次々に埋めてゆく瑛子。その時生年月日の欄を見た新一がある事に気がつく。

「あれ、沢村さんの方が僕より年上なんですね」

「えっ？」

「僕は今年で二十歳ですから」

瑛子は驚いた。瑛子は新一と会って話してみても新一を少なくとも三つか四つは年長者だろうと思っていたのに、それがまさか自分より一つ年下だとは。まるで二十歳とは感じさせない雰囲気を出す新一。これも相手に自分を悟らせない様にする探偵の技術なのだろうか、瑛子は思った。

「では、これからご自宅までお送りします。ご自宅はどこらに？」

「杯戸町です。二丁目の杯戸ハイツというアパートに一人暮らししています」

「ここから車で十分程度だな。では、行きましょう」

車の免許も持っているのか。瑛子は一人敗北感に襲われていた。

第2話：判断ミス（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。感想お待ちしております

第2話：判断ミス

「杯戸ハイツ」は白壁が美しく映える二階建てアパートであった。三年前に建てられたこのアパートは米花駅と杯戸駅のちょうど中間にあたる場所にあり、両駅とも徒歩二十分、自転車でもやはり十五分程度かかってしまう為、公共交通の便では少々不便なところがある。そのせいか、八ある入居スペースが埋まった事は一度もない。現在入居者がいるのは五部屋。二世帯五人と、一人暮らし三人の計八人である。沢村瑛子の部屋は二階の右端、二四号室であった。新一が杯戸ハイツに到着したのは午後三時四十分。瑛子が仕事に出掛けるのは午後四時。新一は車から降り、部屋から瑛子が出てくるのを待った。

「……遅いな」

腕時計に目をやると、針は午後四時二十分を示していた。女性が出掛け支度にやたら時間を使うのは新一は経験で知っているが、仕事の時は話が別だろう。遅刻するかもしれないだし、ましてやその理由が支度に手間取ったでは言い訳にもならない。新一は四時半まで粘ったがそれでも一向に彼女が現れないのを見て、アパート左端に設置されている階段を登った。部屋番号を確認して扉横にあるチャイムを鳴らしてみる。

「沢村さん、工藤です。お迎えにあがりました」

しかし応答はない。新一は再度チャイムを鳴らし、扉をノックしてみた。

「沢村さん、沢村さん？」

いくら呼びかけても返事は無い。新一は携帯を取り出し今朝聞いた彼女の電話番号をダイヤルした。

呼び出し音はする。しかし電話をあてがっているのは反対の耳に、先日テレビの歌番組に出ていたアイドル歌手の声が聞こえて来た。音は部屋の中からするようだ。新一が電話を切ると、歌声もピタリと止む。間違いない。彼女の携帯は部屋の中にある。

新一はドアノブを回した。扉は新一の予想を裏切りすんなりと開いてみせた。鍵がかかっていなかった。こじ開けた様子もない。

テーブルの上には彼女の携帯が無造作に置かれてあった。携帯を開くと、自分からの着信があった事を知らせる表示がなされている。

「沢村さん」

恐らく居ないだろうという思いを抱きながら新一は部屋内を一通り見て回ってみた。しかし、やはりどこにも沢村瑛子は居ない。

(……一体、どこに)

部屋内の静けさに妙な不気味さを覚えた新一は、少し足早に部屋をあとにした。

その日新一は深夜まで杯戸ハイツの前で待ち続けた。しかし結局、

沢村瑛子は新一の前に姿を現さなかった。

一体、彼女はどこに消えたのか。新一が来るより先に仕事に行ったという可能性は、携帯が置きっぱなしになっていた事や部屋の鍵がかかっていなかった事からみても考えにくい。部屋の状況から考えても、彼女には携帯を持ち出す余裕も無く、鍵をかける余裕も無かった。つまり何者かによって強引に連れ出されたという可能性が極めて高いのだ。それも彼女の命を狙う何者かによって。

(……沢村さん)

新一の脳裏に、自分に助けを求めて来た瑛子の表情が鮮明に蘇ってきた。

翌、十月八日。日曜日。新一は探偵事務所の営業開始前に警視庁を訪れている。沢村瑛子の捜索願を出すためだ。

確かに、一刻も早く彼女を見つけ出すには、警察の協力は絶対に必要であろう。しかし今、警察に頼るしかない自分が、一人ではどうにもならない事が、新一は腹立たしく思えた。

瑛子が失踪した事も、元を正せば新一がずっと彼女に張り付いていれば防げたかもしれないのだ。調査期間などを設けずすぐに警察に保護を求めれば、もっと事態は変わっていたかもしれない。新一がそれをしなかった理由はただ一つ。新一が彼女を見て、こんな人が誰かに命を狙われるなどという事は想像出来ないと先入観を持って

しまったからだ。瑛子の失踪は新一の判断ミスが、少なからず原因として考えられる。

(……ごめんなさい。沢村さん)

警視庁から探偵事務所に戻る車の中で新一は何度も、瑛子に詫びていた。

第3話・発見された遺体（前書き）

後書きにて少し余談あり。ぜひ、ご覧になって下さい

第3話：発見された遺体

十月二十一日、土曜日。この日、西森健太は友人の佐田稔と共に東京湾に釣りに来ていた。二人は今年三十五歳。同じ会社の同期入社で、知り合ってからこれ十三年になる。新人歓迎会の時にたまたま席が隣同士になり、お互いに釣り好きであるという事がわかってから二人は休みの日にはこうして釣りに出掛けていた。

この日も、西森の方が佐田を誘い何度目かの東京湾を訪れていた。

「今日はいんまりかもしねえな」

そう言った西森は疲れた様に肩や首を回し、大きく伸びをしてから煙草を取り出し佐田にも勧めた。佐田はそれを受け取るとライターを取り出し煙草に火をつける。二人の口から煙が吐き出された。

「本当だな。久しぶりのボウズかもしんねえ」

朝の七時から始めて既に四時間。時刻は十一時になるうとしている。二人で釣りを始めてボウズだった事は何度かあるが、この東京湾で、四時間当たりすらないのは初めての事だ。釣りというのは、魚がかかって初めて面白いと思えるもの、かからなければただ無駄な時間を過ごしているといってもあながち間違いではないだろう。西森と佐田の妻が、何故二人が釣りに夢中になるのかわからないと言うのには、そういう事が少なからず原因しているかもしねえ。

「このままじゃ、家帰れねえな」

「違う。と、笑う二人の声が海風によってどこかへ流されていっ

た。

「ん？おい、あれ何だろ」

西森が海面上を指差しながら佐田に問うた。佐田は西森の指先に視線をやる。そこには黒いゴミ袋がプカプカと、波にその身を任せて浮いていた。

「おいおい、誰だよ。こんな所にゴミ袋捨てたのは」

佐田は少々驚きの感情が混じった声で言った。ゴミ袋が丸ごと捨ててあるのは初めて見る。

袋は波によって二人の方に近づいてくる。そして、岸壁にぶつかつた。その時二人は妙な音を聞いている。何か固い物がぶつかる音。二人は好奇心をかられた。

「何が入ってるんだろ」

西森が袋の結び目を解き、袋を開けた。二人は同時に中を覗き込んだ。

その瞬間、二人は声にもならない声をあげ、袋から逃げようとする。腰がうまくあがらず、足はガクガクと震え、額からは冷や汗が流れ出た。

「……………ほ、骨」

その瞬間、海風が強く吹き抜け、西森の被っていた帽子が海に吹き飛んだ。しかし、西森の視線はただひたすらにゴミ袋に注がれていた。

「〴〵苦勞様です。警部」

そう言つて迎えたのは警視庁捜査一課の桂川巡査部長である。今年三十になる彼は自分より年下の警部を上司に持つ男だ。

「状況は？」

手袋をはめながら警視庁捜査一課、高木渉警部が言つた。三年前まで巡査部長だつた彼は、三年前にとある事件解決の功勞者として認められ異例の二階級特進となり、巡査部長から警部へとの上がつたのである。この事件解決は日本中の警察の関心を惹き、高木の二階級特進は警視庁だけでなく東京中の所轄署でもちよつとした騒ぎになつた。しかしその騒ぎのせいで、直接高木を見た事の無い者などは、高木渉という男を素晴らしく優秀な刑事という風な認識をしてしまつていた。桂川巡査部長もその一人である。だからこそ、所轄から警視庁に配属され高木の部下に就くと知つた時などは、内心飛び跳ねる程嬉しかつた。しかし、いざ高木渉という男についてみると桂川が思い描いていた男とは全く違つた。優秀じゃない訳ではない。ただ威厳が全く無いのだ。桂川は高木と相對している時、たまた高木が刑事になりたての新人刑事に見える時があつた。そのくらい、高木渉という男からは威厳たるものが感じられないのである。

(……この人を見ると、自分が警視総監になれる気がするから怖いよ)

桂川はしばしばそんな事を思っていた。

「遺体はあのゴミ袋に入っていたそうで、それをあちらのお二人が見つけたそうです」

「……今、わかっている事は？」

「鑑識の話ですと、遺体は死後少なくとも二週間程度経過しているそうです。死因は特定出来ていませんが、遺体に切断された跡があったと」

「……バラバラにされていたんですか？」

「多分。恐らく、犯人は被害者を殺害した後、遺体をバラバラに切断し、それをゴミ袋に詰めここに遺棄したのでしょう。そして、遺体が発見されない内に腐敗が進み、遂に白骨化してしまった。そんなところではないでしょうか」

高木は少し考える素振りをしてから

「……遺体は死後少なくとも二週間経過していると言いましたが、この時季、遺体の白骨化はそんなに速く進むものなんですか？」

「確かに、本来ならこの時季だと一ヶ月近くかかるそうですが、塩分が含まれている水、いわゆる海水の中では白骨化は急速に進むんだそうです」

「……身元の特定は難しいかもしれませんね」

「一応、遺体の歯の治療痕などから調べるつもりです」

この時高木はふと、ある事を思い出す。

二週間前、警視庁に新一が訪れていた時の事だ。

(………そういえばあの時、沢村瑛子とかいう人の搜索願をしに来て
るって)

彼女が失踪したのは二週間前。遺体の死後推定日とも一致する。

「……………可能性はあるな」

高木の呟きは桂川には聞こえなかった。

第3話：発見された遺体（後書き）

文中にあります、白骨化の進み方ですが、文中の言葉が正確であるかどうか、確証はありません。あくまでも作者の予想です。ただ、海水のように塩分が含まれていると白骨化は急速に進むというのは事実だと思われます。

以上です。ここまで読んでいただきありがとうございました。

第4話：被害者は？

工藤探偵事務所に警視庁の高木から電話が入ったのは午後三時頃の事であった。ちょうど訪ねて来ていた依頼人が帰った時で、新一はコール二回目で通話口に出た。

「やあ、突然すまないね。今、大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫です。何かありましたか？」

「実は、ニュースでもう出てるから知ってるかもしれないけど、今朝東京湾から人間の白骨遺体が見つかったね」

確かに先程、速報でそんな事を言っていたのを新一は耳にしている。しかしちょうどその時依頼人が訪ねて来たので、すぐにテレビを消してしまった為、詳細については殆ど何も知らないと言っただけであった。

「その見つかった遺体の身元なんだけどね、科警研からの報告で、遺体は十代後半から二十代前半の女性だと判明したんだ。遺体は少なくとも死後二週間程度経過しているらしくて、それに該当する行方不明者をリストアップしたら、君が先日搜索願を出した沢村瑛子さんが捜査線上に浮上してね。まだ遺体が沢村瑛子さんだと決まった訳じゃないんだけど、もしもの事を考えて君に連絡したんだ」

「……そうですか。すいません、わざわざ」

「まだ身元特定作業は続いてるから、また何かわかったら連絡する」

よ

「……はい、お願いします」

新一はゆっくりと受話器を置いた。椅子に座りこみ、深く溜め息をつく。目を瞑ると沢村瑛子の顔が鮮明に蘇って来た。

「……………沢村さん」

新一の小さな声が静かな事務所内に木霊した。

夜、高木と桂川は杯戸町にある「高山歯科医院」を訪ねていた。高山歯科は沢村瑛子の自宅から最も近い距離にある歯科医院である。二人は現在、最低でも二週間以上前から行方不明になっている十代後半から二十代前半の女性をリストアップし、その人物の行きつけにしていた歯科医院を訪ね、遺体の歯型とその人物の歯型を照合してもらおう身元特定作業を行っている最中であった。沢村瑛子もリストアップされた内の一人だったのだが、彼女の自宅をいくら調べても歯医者や診察券が出て来なかった為、仕方なく彼女の自宅から最も近い距離にある歯科医院をとりあえず訪ねたのである。院長の高山は五十代後半の眼鏡を掛けた男で、温和な表情を高木達に向けた。

「お忙しいところすみません。実は、ある事件の捜査を今しております。こちらの方はご存知でしょうか？」

高木は沢村瑛子の写真を高山に見せた。高山は写真を見た途端

「ああ、知ってますよ。子供の頃から何度も来てる子だからねえ」

「では、この方の治療カルテも、ありますよね」

「ええ。そりやありますが」

「見せていただけませんか」

「……………あの、彼女何かあったんですか？」

高山が不安げな口調で聞いた。

「……………まだ調査中なので、あまり詳しい事はお話出来ませんが、こちらの女性がある事件の被害者となっている可能性があるんです。それを確かめる為に我々が捜査を行っております、カルテを見せていただけませんか？」

「……………わ、わかりました。ちょっとお待ち下さい」

そう言うと高山は一度奥の部屋へ消え、数分後に一枚のファイルを持って姿を現した。

「こちらです。このカルテは一番最近治療に来たもので、左奥歯の痛みから見てほしいと」

高木はカルテを見る。左奥歯の治療痕、それは遺体とも一致している。しかしその時、桂川がある事に気がつく。

「警部、このカルテ沢村瑛子さんのものじゃありませんよ」

確かに名前は沢村瑛子のものではなかった。

「あの、この方のカルテは間違いなくこれなんですか？」

「ええ。木本光子さんでしょ？」

「木本光子さん？」

「ええ、その写真の方です」

「この写真の方は、沢村瑛子さんという方ですよ。木本さんではありません」

「えっ、違うんですか？私てつきり、木本さんだと」

高山は頭をポリポリ掻いた。

「沢村瑛子さんのカルテ、見せていただけますか」

「……いや、その方なら私は知りませんな。木本さんによく似ていたから、気付かなかったですよ」

しかし遺体の歯型とこの木本光子の歯型はどうやら同じものである様だ。つまり、あの遺体は木本光子なのだろうか。

「……どういう事だ」

高木は高山歯科を出た後も、何か考えに耽った様で口を開かなかっ

た。

第5話・自分がすべき事（前書き）

今回は少々長くなってしまいました。感想・評価お待ちしております

第5話：自分がすべき事

東京湾から人間の白骨遺体が見つかったから丸一日が経過した十月二十二日。事件は全貌のほんの一部を見せ始めていた。昨日高木達が出た遺体の歯型と一致するカルテにあった木本光子という名前は捜査本部を困惑させ、事件の益々の混泥を予感させたが、その予感とは裏腹に、遺体の身元が判明し、今度はそのことが事件解決への第一歩となるだろうという思いを捜査員達は抱き始めていた。高木は捜査会議が終了した正午過ぎ、昼食に行こうという桂川の誘いを断ると携帯電話のダイヤルを押し、耳に当てた。

「以上が調査結果です。やはり、旦那さんは……」

正午過ぎ、工藤探偵事務所にはちょうど先日旦那の浮気調査を依頼してきた女性が調査結果を聞くために訪ねて来ていた。新一から調査結果を聞くと堪えきれなかった涙が目から流れ出て頬を伝った。

「……そうですか。やはり主人は」

多少の覚悟はしていた様だが、やはり長年連れ添ったパートナーが自分ではない他の女と恋愛関係にあるというのは辛いものだろう。今までにこうして涙を流す人を新一は何度も見ているが、その都度襲ってくる罪悪感に心は蝕まれていくのだった。

「……ありがとうございます。これで、きつぱり旦那と別れる事が出来そうです」

「……………」

「あの、その写真いただけますか？」

女性は浮気の証拠として新一が撮影した写真を指差した。

「ええ、構いませんよ。では、こちらの書類にサインを」

女性が書類にサインを書いている時、新一の携帯電話がバイブレータで着信を知らせた。仕事中にはいつもマナーモードにしている。着信の相手は高木。新一は一旦席を離れ、電話に出た。

「もしもし」

「あつ、工藤君。今大丈夫かな？」

「すみません、今ちょっと来客中でして、すぐにかねおしますから」

「そうか、わかった。待ってるよ」

高木からの連絡が入ったという事は、事件に何らかの進展があったという事。恐らく遺体の身元が判明したのだからと新一は思った。新一は小さく溜め息をついてから、席に戻った。

「遺体の身元は、沢村瑛子さんだと断定されたよ」

「……そうですか」

やはり。と新一は視線を宙に向けた。同時に彼女を殺害した犯人に強い憎しみの気持ち湧くのを覚えた。

「あの高木刑事、疑う訳じゃないんですけど、遺体が沢村さんだと断定された決め手は何だったんですか？」

「……一応、歯型が一致した事が決め手になったんだけど、ちょっとややこしい話が裏にあつてね」

「ややこしい話？」

「実は昨日、僕等は身元特定作業として被害者の可能性がある人物が利用していた歯医者を訪ね歩いていったんだ。遺体の歯型と治療痕が一致する人物を探すためにね。勿論、その中には沢村瑛子さんの名前もリストアップされていたんだが、彼女の自宅からは歯医者の診察券なるものが見つからなかったんだよ。それで、仕方なく僕等は彼女の自宅から一番近い場所にある高山歯科医院というところを訪ねたんだが、そこで意外な事実が判明してね」

「意外な、事実？」

「ああ。まあ、結論から言うと沢村瑛子さんはその歯医者を訪れた事は無かったんだ。だけど、僕等はそこで遺体の歯型と一致する治療痕を持つカルテを見つけた。受診者の名前は、木本光子さん。沢

村瑛子さんと同じクラブで働く女性だ。つまり、遺体の歯型と一致したのは木本光子という人のカルテだったんだよ」

「ちょっと待って下さい、だったらあの白骨遺体は、その木本光子さんという人なのでは？」

「いや、木本光子さんは生きていますよ。それは今朝、我々が確認している。僕等も最初は訳がわからなくてね、だけどその謎は木本さん本人が説明してくれた」

それは今朝の事。木本光子の住むマンション「杯戸プラザ」を高木と桂川が訪ねた時の事である。遺体の歯型と一致した治療痕を持つ木本光子という女性。リストにも出ていないこの女性が何者なのかあの白骨遺体は彼女なのか。二人は様々な思いを抱きながら木本の表札の出る部屋のチャイムを鳴らした。

「……………はい」

チエーンロックを付けたままの為、扉は僅かしか開いていないが、その僅かな隙間から覗く顔に高木は見覚えがあった。

「朝早くから申し訳ありません。警察の者ですが、木本光子さんでいらっしやいますか？」

「……………そうですけど」

「実は、少々お尋ねしたい事がありました。よろしいですか？」

木本光子は一旦扉を閉めるとチェーンロックを外し、今度は全身が見えるまで扉を開いた。

「……………何でしょうか」

「すみません。あの、こちらの方ご存知ですか？」

高木は沢村瑛子の写真を見せた。光子は写真を少し見て

「ああ、知ってますよ。沢村瑛子さんでしょ？」

「ご存知でしたか。あの、あなたと沢村さんはどういったご関係で……………」

「同じクラブで働く同僚です。まあ、瑛子さんは最近無断欠勤してましたけど……………」

「プライベートなお付き合いなどは……………」

「まあ、多少はありましたけど。あの、瑛子さん何かあったんですか？」

光子が不安げな表情で聞いた。

「その前に、木本さん。あなたここ最近、高山歯科医院へ行かれませんでしたか？」

「えっ、高山歯科ですか？」

「ええ。あなたがよく利用している筈ですが」

「ええ、歯医者では子供の頃から高山歯科ですけど。でも、ここしばらくは行ってません」

「……最後に行かれたのは、いつ頃でしょう」

「さあ、半年以上前だと思いますよ」

光子の発言に桂川が食い下がる。

「そりゃ妙ですなあ。高山歯科にはあなたが今月の初め頃に医院を訪れている証し、あなたの治療カルテがあつたんですがねえ」

光子は少し驚いた風の表情を見せたが、すぐに

「ああ、それは私じゃなくて、瑛子さんですよ」

「……しかし、受診者は確かにあなたのお名前でしたよ？」

「ええ。私の診察券で、受診してますから。カルテは私の名前の筈です」

「どういう事です。事情を、話していただけませんか」

光子はバツが悪そうな顔をしてから

「実は、私の診察券で瑛子さんが治療を受けたんです」

二人は驚きを隠せない。

「な、何でそんな事を」

「それが、一ヶ月程前に、瑛子さんが普段利用していた歯医者が潰れてしまったらしいんです。ちょうどその頃瑛子さん、歯が痛むつて言つてて、新しい歯医者を探してたみたいなんですけど」

「それで、自宅に一番近い高山歯科医院に行く事にした、そういう事ですか？」

「はい。瑛子さんも存在は知ってたみたいですから、そこにしたいなんですけど、私がそこを利用しての事を知ったら、診察券を貸してほしいって言つてきて」

「……何故、沢村さんはそんな事を」

「何か、初診だからって高い料金取られるのが嫌だったみたいです。よ。それで、私の診察券で治療を受けたいって言い出して」

「で、あなたは診察券を貸したんですね？」

「はい。別に断る理由もないし、私と瑛子さん、ちよつと似てるから。それにあそこの先生かなり年配の人でしょ？だから、気づかないだろうと思つて」

確かに光子の読み通り、高山院長は全く気付いていなかった。

「だから、最近の私の治療カルテは全部瑛子さんの治療カルテなんです。私じゃありません」

「以上の証言から、遺体は沢村瑛子さんだと断定されたんだ」

高木の話聞き終わった新一は深く溜め息をつき、椅子に腰掛けた。

「……沢村さんは、金銭的な事には随分神経質だったんですね」

「みたいだね。まあ、そういう人も世の中にはいるって事だよ。あつ、すまない工藤君。そろそろ切るよ、まだ捜査は始まったばかりだからね、色々忙しいんだ」

「じゃあ。と言い残し電話は切れた。」

新一は思う。東京湾からあがった遺体が沢村瑛子であると断定された以上、自分が彼女に出来る償いは事件の首謀者を明らかにし、その罪を裁く事以外に無い、と。

自分の判断ミスから最悪の結果を招いてしまった今回の事件。指をくわえて見ている事は出来ない。

「……やるしかない」

新一は決意の籠もった目で、まだ闇に覆われた先にある真実という光を見据えていた。

第6話：動機の謎

あまり聞き慣れない携帯電話のアラームが意識の奥深くから聞こえ新一はゆっくりと重たい瞼を上にあげた。枕元で鳴り続ける目覚ましアラームを止めると新一はゆっくりと起き上がり、隣で未だ可愛らしい寝息をたてる恋人を起こさぬ様にベッドを出る。ベッドの下に散らばった服から自身の物だけかき集めると生まれた姿のまま寝室を出、その足で浴室へと向かった。

時刻は現在午前六時三十分。何時もより一時間近く早い起床時間である。何故わざわざ一時間早く起きたのか。今日、十月二十三日は月曜日で平日の探偵事務所営業開始時間、午前九時に合わせ何時もなら七時半頃に起床するのだが、実は今日は探偵事務所に行く前に寄り道をするつもりだった為、こうして一時間早く起きたのであった。

シャワーを浴び仕事着に着替えていた頃寝室の扉が開き、中から新一のシャツを一枚羽織っただけの恋人が眠そうな目をこすりながら出て来た。

「おう。悪いな、起こしちまったか」

「……………もう出掛けるの？随分早いね」

「ああ。ちょっと探偵事務所に行く前に寄り道していくからさ」

「……………朝ご飯は？」

「途中で何か買つよ。お前ももう起きるか？」

「……ええ。私も今日は少し早く研究所に行かないといけないから。鍵、忘れないようにね。じゃ、行ってらっしゃい」

それだけ言い浴室へと消えた恋人を新一は溜め息混じりに見つめていた。毎度の事だが肌を重ね合わせている時と素の彼女とでは随分ギャップがある。情事中はあんなに甘えて来る彼女も、翌朝ベッドを出ると普段のクールに早変わりし相手を寄せ付けない雰囲気さえ醸し出すのだ。まあ彼女は朝に弱い為、余計にイライラしてそういう雰囲気が出てしまうのかもしれない。とにもかくにも、朝彼女が機嫌を損ねてしまうと、機嫌を直させるのがどんなに難しい事かを知っている新一は無愛想な彼女に文句一つ言わず、出掛ける時に玄関先で彼女に聞こえていないのを承知のうえ、呼びかけた。

「じゃあ行ってくるよ。志保」

車に乗り込み、さあ出発しようとした時新一の携帯がメールの受信を知らせる為鳴った。送信者は恋人である宮野志保。本文には絵文字など一切なく、一行だけ言葉が綴られていた。

「気をつけてね」

新一はそれを見て小さく微笑むと車を静かに出発させた。

「杯戸ハイツ」周辺地域はアパートやマンション、一戸建ても多く散在するいわゆる住宅街である。その為通勤通学の時間帯や下校時

になると多くの人で賑わうのだが、それ以外の時間は人通りもなく車も滅多に通らない場所で日中誰かが叫び声でもあげようものならたちまち大騒ぎになるだろうという事は容易に想像できた。

沢村瑛子が失踪した日以来に杯戸ハイツを訪れた新一は、大家のおばさんに頼み瑛子の部屋に入らせてもらった。瑛子の部屋は未だ家具などがそのまま置かれていて、大家のおばさんによると直に処分するつもりだったという。

「ただ、沢村さんの私物をどうしようか困ってね。写真とか、色々あるから捨てる訳にもいかなかった」

「沢村さんのご両親に電話して、引き取ってもらえばいいんじゃないんですか？」

「それが、沢村さん子供の時にご両親を亡くされてるらしくてねえ。身内がないみたいなのよ」

その情報は新一も初めて聞いた。大家のおばさんは終わったたら声掛けて下さいとだけ言い残し去っていった。

部屋の中は以前来た時と何も変わっていない。高木の話だと昼から警察が家宅捜索に入るといふ。彼女の部屋から犯人の手掛かりになるものが見つからないか調べるためであろう。

沢村瑛子が連れ去られた可能性がある時間帯は新一と別れた午前十一時以降から、新一が迎えに来た午後四時前、正確には午後三時四十分の間。犯人は白昼堂々犯行を行っているが、ちょうど人通りが少ない時間帯を選んでいる。犯人はこの辺りの事に詳しい人物か、それともある程度下調べをしていたのか。新一は扉の鍵穴を見る。

(……前も確認したけど、こじ開けた様子は無い)

瑛子が最初から鍵をかけていなかったというのは命を狙われている人間の心理としては考えにくい。となると、彼女は自ら鍵を開けたという事になる。

(……誰かが彼女を訪ねて来た。しかし見知らぬ人なら警戒して、簡単にはドアを開けたりしない筈、つまり訪問者は彼女の顔見知り、彼女が信頼を置く人物か。いや、まだ決めつけるのは早い)

しかしそれにしても、沢村瑛子は何故命を狙われていたのか。新一が抱いた先入観から考えられるとおり、沢村瑛子という女性は誰かに命を狙われるというような人物ではない。怨恨ではないとすると口封じだろうか。しかし瑛子から殺人事件を見たという話は聞いていない。何より瑛子自身が命を狙われる理由に心当たりが無いのだ。

(犯人は何故、沢村さんを……)

時計を見ると間もなく八時十分になろうとしていた。新一は部屋を出ると、大家のおばさんに礼を言い車を探偵事務所へと向かわせた。

第7話：行動の謎

午後八時頃。日中入っていた予定を片付け探偵事務所をあとにした新一は沢村瑛子が勤務していた新宿のクラブ「蝶々」を訪れていた。クラブに行くというのに車を使う訳にもいかず、米花駅から電車を乗り継いで来ている。店は新宿駅から徒歩十五分程のところであり、周囲には高そうな店々がいくつも軒を連ねていた。新一は店内に入る前に財布の中身をおそろおそろ確認していた。

扉を開けると薄暗い照明がそれ程広くない店内を幻想的な世界に演出していた。店のママらしい女性が、愛想良い笑顔で新一を迎えた。

「いらつしゃいませ。あら、素敵な方。お初めてですね？」

新一は店の一番奥の席へ案内され、隣には綺麗に着飾った女性が二人寄り添う様に座った。

「お飲み物は、どうなさいます？」

そう言ったのは「春」という名前のホステスである。大人しそうな女性で、笑顔がとても素敵な女性だ。新一はとりあえず水割りを注文し、最初の内は他愛ない話をしながら本題を切り出すチャンスを探っていた。

「春さんて、このお仕事長いの？」

「いいえ、まだ一年程ですわ。仕事を探していた私に、友人が紹介してくれたんです」

その時、彼女の表情に陰りが差したのを新一は見逃さなかった。

「……もしかしてその友達って、沢村瑛子さんの事？」

「春」は目を大きく見開いて新一を見た。どうやら凶星のようだ。何はともあれこれは好都合だと新一は話を続ける。

「……やっぱり」

「……知ってるんですか？瑛子のこと」

「ええ、ちよつとね……。彼女に仕事を依頼されまして」

「仕事？……あの、失礼ですけどお客さん」

新一はポケットから名刺を取り出し「春」に渡す。彼女はそれを見て、また驚いた様に新一を見た。

「あ、あなた。あの高校生探偵の……」

随分懐かしい呼び名だ。と苦笑いを浮かべる新一。「春」は「春」で相手の素性を知り、幾分か警戒心を抱いている様だ。それにしても彼女は感情がすぐに顔に出る。新一は思わず自分の感情をなかなか表に出さないポーカーフェイスの志保と比べていた。

「……実は、沢村瑛子さんの事でちよつと聞きたい事があるんだけど、ここは場所が悪い。仕事は何時終わるの？」

「……十二時過ぎには、店を出ますけど」

「じゃあ、それまで待つてるよ」

そう言った後、水割りを一杯だけ飲み新一は店を出た。店を出る時、ちようど店に入って来た中年男の客と肩がぶつかった。

「すみません」

新一の謝罪に男はチラリと新一を見ただけで何も言わず、席へと腰を下ろしていた。

「春」は本名を平島春江というらしい。沢村瑛子とは小学校の頃からの友人で、今でも時折二人で旅行に行ったりする事もあったそうだ。

春江は十一時過ぎに店を出てきた。思っていたより早い登場だったが、彼女が人目を盗んで出て来たらしい事はやたら後ろを振り返る仕草や、すぐに新一を店の傍から離れた事からも容易に想像がついた。彼女なりの優しさがチラリと垣間見えた気がした。

「私の家、すぐ近くなんです。お話ならそこでお聞きしますわ」

そう言って案内された小さなマンションの三階で彼女は一人暮らしらしい。しかし、数時間前に会ったばかりの男を部屋に入れるというのは女性とすれば少々無警戒すぎはしないだろうか。もしかして彼女は酔っているのかもしれない。そうなればまともに話を聞けそうもないなど、少しの落胆を覚えながら新一は部屋の中に足を踏み

入れた。

しかし新一の落胆とは裏腹に、彼女は新一の質問にしっかりと受け答えしてくれた。

「瑛子と私は、小学校の頃に同じクラスになったのが縁で仲良くなつたんです。高校は別々になつたんですけど、連絡は取り合つたりしてて、たまに会つたりしてました」

「……あなたに今の仕事を紹介したのは、沢村さんなんですね？」

「ええ。ちょうど仕事を探してた私に瑛子が、自分が最近働き始めたクラブで一緒に働かないかって言ってきたんです。ママさんも信頼出来る人で、皆いい人だからって」

「それからも、沢村さんと親交は続いた訳ですよね？」

「はい」

「彼女が亡くなる前に、彼女に何か変わった様子があったり、相談を受けたりはしませんでしたか？」

「……そう言えば、瑛子が亡くなる十日ぐらい前から、たまに瑛子が何かに怯えるみたいな様子を見せる事があつたんです。私が、どうしたの？って聞いても、何でもないの一点張りです。私も、それ以上は聞かなかつたんですけど」

恐らくそれは、自分の命を狙っている誰かに彼女が怯えていたのだろう。春江によるとその日あたりから、瑛子は急に人付き合いが悪くなつたらしい。

(……多分彼女は、周囲の人を巻き込まない為に)

誰にも自身の恐怖心を打ち明けられず、彼女は辛かった筈だ。やっ
と頼る事が出来た私立探偵も、親身になってはくれなかった。彼女
の胸中を考えると、新一は自分の不甲斐なさが身に染みた。

「……沢村さんが、誰かに恨まれていたというような話を聞いた事
はありませんか？」

「いいえ、ありません。私の知る限り、瑛子は誰かに恨まれたりす
る様な子じゃなかったですから」

その点はやはり新一と同意見だ。

「最後に、沢村さんはご両親を亡くされているんですよね？」

「ええ。少なくともお母さんは亡くなられています」

「どういう事ですか？」

「瑛子の両親、瑛子が小学校四年生の時に離婚してて、それからお
父さんとは離れて暮らして居るんです。お母さんはその次の年に亡く
なったんですけど、お父さんが今生きてるかどうかはわからなくて。
親戚に引き取ってくれる人もいなくて、瑛子、小学校五年生から高
校卒るまで、ずっと施設に入ってたんです」

そんな話は初めて聞いた。彼女の過去と今回の事件が関係している
かどうかはわからないが、現在の沢村瑛子からは動機は見当たらな
い。だったら、過去に遡るしか動機を探す道はなかった。

「ありがとうございます。またお話を聞く時がくるかもしれないんで、その時はご協力をお願いします」

「はい。勿論ですわ」

ふと時計に目をやると既に十二時を廻っている。

「あつ、やばい。じゃあ今日はこれで失礼します」

立ち上がって玄関へ向かい、部屋を出ようとした時、春江の手が新一の腕を掴んだ。

「今日は、家に泊まってって下さい」

「えっ?」

「今から駅に行っても、どうせ終電には間に合いませんし。お財布の中も、寂しいんでしょ?タクシー代も出せませんわ」

「……どうして、それを」

「ママが言っていました。お財布の中が、お会計の時に見えちゃったんですって。探偵さんって、案外儲からないのねえ」

「…ハハハ。そういう訳でもないんですけど」

「とにかく、今日は泊まってって下さい。私もまだ色々お話を聞いたもの、お店ではちゃんとお話出来なかったでしょう?だから、ね」

「?

彼女の笑顔に思わず誘いを受けてしまいそうになるが、何とか理性を保ち、欲望を断ち切る。

「お気持ちだけで充分です。歩いて帰りますから」

「……………女性に恥かかせる気？」

上目遣いにそんな事を言われ理性が崩壊しかけたその時、新一の携帯が鳴り響いた。

ディスプレイに表示される名前は「宮野志保」

「もしもし、志保？」

「……………あなた、今何処にいるの？」

車は自宅。終電を過ぎても帰って来ない新一を心配したのだろう。決してそれを素直に言いはしないが。結局、事情を聞いた志保がこれから新宿駅まで迎えに来てくれるらしい。

「……………と、いう訳なんです。今日はこれで失礼します。またご協力お願いしますね」

「……………わかったわ、今日は諦めます。またお店に来てくださいね。私、待ってますから」

頬が赤い。やはり彼女は酔っていたようだ。

新宿駅前で志保を待つ間新一はある事を考えていた。それは犯人が

何故沢村瑛子の遺体をバラバラに切断したのかという事だ。遺体をバラバラにする犯人の心理として幾つか考えられるものがあるが、その一つに、遺体の遺棄を簡単にする為というものがある。確かに遺体をバラバラにすればゴミ袋などにつめ、海に沈めたり山に埋めたりして事件の発覚を遅らせる事も出来るし、遺体さえ見つからなければ事件は永久に発覚しない。犯人にとってこれほど都合な事はないだろう。

その時、新一の頭の中に疑惑の影が差す。

沢村瑛子の遺体が入っていたゴミ袋には重しはついていなかった。高木によると重しをつけたような痕跡も無かったという。これは犯人の行動としては少し妙ではないだろうか。先述したとおり、遺体が見つからなければ事件は発覚しない。つまり犯人が捕まる事も無いのだ。しかし遺体を遺棄する以上、犯人心理として普通は発見されない様に多少なりとも工夫する筈。海に遺棄するなら、ゴミ袋に重しを結びつければ袋は浮上せず、遺体は見つからない。つまり事件は発覚しないのだ。にも関わらず、その様な工作をした痕跡がないとはどういう事が。

(……犯人は、遺体を隠す気は無かったのか？だったらなんで遺体をバラバラにしたりしたんだ。余計な手間が増えるだけじゃねえか) 考えに耽っていた時、少し向こうから聞き覚えのあるクラクションが鳴った。

第8話：まだ……

「花米荘」は米花町一丁目にある古い木造アパートである。共同玄関、共同便所、風呂無し、更に雨が降れば雨漏りする典型的なオンボロアパートであった。その為か付近住民からは幽霊アパートと気味悪がられ、近い内に取り壊しが予定されていた。現在入居者は大家の石山を含めて僅か三名。石山は御年六十歳になる男で、花米荘に住み始めて五年になる。

十月二十四日、この日石山は十月分の家賃を未だに滞納している奥井という男の部屋を訪ねていた。家賃といえども、こんなボロアパートの家賃値段などたかが知れているだろう。普通に仕事をしていれば払えない金額じゃない。にも関わらず滞納する奥井という男に石山は少なからず嫌悪感を抱いていた。

「奥井さん、大家です。家賃、払ってもらえませんかねえ」

扉をノックしながら呼び掛けるが応対は無い。

「奥井さん、居ないんですか？」

石山はドアノブに手をかけてみた。鍵はかかっている。部屋の中は真っ暗である。隣の建物に遮られ、陽の光が入らない為だ。

暗闇に石山の目が慣れ始める。そして、途端に浮かび上がったそれに石山は腰を抜かし悲鳴をあげた。

「……………あ、ああ」

暗闇の中で部屋の主である奥井が首を吊られ、力無く垂れ下がって

いた。

花米荘には警視庁から高木と桂川、他数人の刑事が捜査員として派遣されていた。指揮は当然のごとく、警部の高木が執る。部屋の中は本や原稿用紙がそこら中に置かれていて、足の踏み場もない。

「桂川さん、状況は？」

「はい。亡くなっていたのは、この部屋に住む無職、奥井徹也さん。四十七歳。死因は窒息死と思われます。死亡推定時刻は深夜二時頃ではないかと」

「……………自殺、ですか」

「奥井さんの首に吉川線などは見つかりませんでしたので、恐らくは。今、遺書も探しています」

ちよつどその時鑑識の巡査が二人の会話に入ってきた。手には白封筒を持っている。高木はそれを受け取ると中から一枚の紙を取り出した。

「……………これは」

高木から連絡を受けた新一が花米荘に到着したのは奥井徹也の遺体が現場から運び出されたすぐ後であった。新一は玄関前の立ち入り禁止ロープをくぐり、中へと入った。

新一は高木から花米荘に来てほしいと言われただけで、奥井徹也の件は聞いていない。その為、新一は自分が何故呼ばれたのかわからず高木にその理由を問い質していた。

「いや、実はね、今朝このアパートの一室から首吊り遺体が見つかったんだ。名前は奥井徹也さん、四十七歳。現場の状況から見て我々は自殺と考えてる」

高木は新一に白封筒を渡した。

「これは？」

「遺書だよ。奥井さんのね。そこには、自殺の動機について書かれていた。沢村瑛子を殺害したのは、自分だとね」

新一の顔に衝撃の色が浮かぶ。遺書には高木の言うとおり沢村瑛子殺害の自供と、その犯した罪の重さに耐えかねて自ら命を断つという事がワープロ文字で書かれてあった。殺害の動機は、生活金に困っていた奥井がクラブ「蝶々」で出会ったホステス「花」こと沢村瑛子の貯金を知り、その金を奪おうと思ったから。しかし、いざ実行してみると途端に自分のした事が恐ろしくなり、逃げようとも思っただけののだが悩んだ末、自殺という方法を選んだのだという。

更に遺書の最後には、沢村瑛子が自分の娘である事を綴った文もあった。

「……………娘」

「ああ。沢村瑛子、旧姓は奥井瑛子。二人は正真正銘、親子だよ」

その日の夕刊に「バラバラ白骨化殺人事件解決。犯人は、被害者の父」という見出しで事件解決を知らせる記事が出ていた。容疑者は自殺。しかし、遺書から犯行が判明。生きたまま逮捕出来なかったのが悔しいと、記者会見で誰かが言っていたのを新一は記憶している。

「……………納得いつてない顔してるわよ」

事件のニュースと一緒に見ていた志保が言った。志保は新一の肩に頭を預け、目を瞑っている。

「……………ワープロ書きだったんだ。遺書が」

「別に、ワープロ書きの遺書なんて珍しくないと思うけど」

「まあな。だけど、普段手書きに慣れてる人が、遺書だけワープロ書きにしたのは不自然だろ？」

「……………どういう事？」

「亡くなった奥井さんの部屋には、大量の本と原稿用紙があつたんだ。それこそ、足の踏み場がないくらいに。聞けば、奥井さんは昔小説家を目指してたらしくてな、今でも趣味程度に執筆を続けてたらしいんだよ。奥井さんは、その原稿を全て手書きで書いてる。多分、昔からそのスタイルなんだろう。そこまで手書きにこだわる人が、自分の遺書だけをワープロ書きにするっていうのは、不自然極まりない行動だと、俺は思うんだ」

「……………確かに、ちょっと気になるわね」

新一はテーブルの上の珈琲に手を伸ばし一口啜る。

「……………事件は、まだ終わってない」

隣に居る志保が小さく笑みを浮かべた。

第9話：去り際の挨拶

十月二十五日の東京は低気圧の接近による雨が朝から断続的に降り続いており、新一が午前十一時頃、ある場所へ向かう為に探偵事務所を出た時には雨は本降りになっていた。

新一が訪れた「朝日園」というのは沢村瑛子がかつて暮らした児童養護施設である。小学校五年生の時に母親を亡くし、身寄りが無くなった彼女は高校を卒業するまでの八年間をこの施設で過ごしている。瑛子にとっては第二の実家とも言える場所であった。新一がこの施設を訪れた理由は、彼女の過去についての話を聞くため。以前、瑛子の友人である平島春江からも昔の話は少し聞いたが、詳しい事はあまり聞いていなかった。

施設の建物の前には小さな運動場があり遊具も並んでいる。今日は雨であるから、外で遊ぶ事は無いだろうが天気の良い日には子供達がここで元気にはしゃぎまわるのだろう。新一は運動場に出来た水たまりを避けながら歩き、やがて施設の玄関に辿り着いた。扉を開けると、両脇にげた箱がありそれぞれの部屋に名前の書いたシールが貼られてある。今靴が入っているのは十名程。どれも幼児の履く種類のものばかりであった。

新一は傘についた雨滴を外で払い、扉を閉めると施設内に向かって声をかけた。すぐに若い女性の声で返事があり、新一の待つ玄関先へいそいそと出てきた。

「はい、何でしょうか」

眼鏡をかけた女性で、とても気が弱そうに見える。彼女の後に尾いて来た幼い女の子を見ると、どうやら一緒に遊んでいたようだ。女性職員は女の子に部屋に戻るよう促し、新一に応対した。

「突然すいません。私、工藤といいますが、園長先生はいらっしゃいますか」

「……………園長に、どういったご用件でしょう」

「……………沢村瑛子さんの事で、少しお話を聞きたいんです」

それを聞いた女性職員は、またか。という顔をした。

「……………警察の方ですか？」

「あつ、いえ。私は、こういう者です」

名刺を渡された女性職員は少し驚いた表情を見せ

「……………探偵、さん。ですか」

「はい。米花町の方で探偵事務所を経営しています。怪しい者でない事、わかっていただけましたか」

「……………中に、どうぞ」

スリッパを出され、奥の部屋に案内される。どうやら来客用の部屋らしい。すぐにお茶が用意され新一の前に置かれた。

遠くから子供達の笑い声が、微かに聞こえた。

「お待たせしました。園長の、江藤です」

園長というだけに、かなり年のいった人を想像していた新一は、実際の江藤氏のまだ四十程度だろう若々しさに面食らっていた。少し日焼けした肌が印象的で、とても温厚そうな男性である。

「突然押し掛けて、申し訳ありません」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それより、沢村瑛子ちゃんの事でお話があると聞きましたが」

「はい。彼女の昔の事について」

「……昔の、事ですか」

ちょうどその時部屋にまた可愛らしい女の子が入って来た。女の子は新一には目もくれず江藤に駆け寄った。

「コラコラ、駄目じゃないか美里ちゃん。ここに入って来ちゃ」

「だって、えんちようせんせえと遊びたかったんだもん」

「ハハハ。ごめんよ、美里ちゃん。先生、今お客さんとお話してるんだ。お話が終わったら遊んであげるから、それまでお部屋で遊んで下さい」

「うん。せつたいだよ？」

新一と目があった江藤は少し恥ずかしそくに頭をかいた。

「いや、すいませんね。あの子は美里ちゃんと言って、最近懐いてきてくれた子で」

「……最近？」

「ええ。こつという施設に来る子供達というのは、親が居なかったり、親から虐待を受けていたりする子が殆どです。そのせいか、入つて来た当初は心を閉ざしてしまう子が多くて。さっきの美里ちゃんも、最近になって漸く笑ってくれる様になりました。瑛子ちゃんも、入つて来た当初は誰にも心を開かなくて、本当に苦労しましたよ」

江藤は思い出を噛み締める様に話し始めた。

「彼女がこの施設に来たのは、彼女が小学五年生の時です。施設に来る一年前に、両親が離婚して、以来母親との二人暮らしが続いていたんですが、その母親も随分精神的に参っていたのでしょう。翌年に自殺しました」

「自殺!？」

「ええ。発見者も彼女です。相当ショックだった筈ですよ」

母親が亡くなっているのは以前に聞いた。しかし自殺だったというのは初耳である。

「あの、沢村さんの両親が離婚した原因は何だったんでしょうか」

「……父親の母親に対する暴力、いわゆるDVというやつです」

「……DV」

「ええ、本当にひどい話です。彼女もその現場を目の当たりにしたようで、ここに来た時は人を信じられない、一種の人間不信状態にありました。初めて喋ってくれたのが、入所して約半年経った、九月三十日でしたよ」

「……やけに正確な日付を覚えてるんですね」

「はい、彼女はやっぱり特に苦労した子でしたし、その日は私の誕生日でした。その誕生日会の時に、彼女が初めて話しかけてくれたんで、よく覚えているんですよ」

「……沢村さんは、ここを出てからもよく来たりしてましたか？」

「ええ。たまに来ては元気な顔をみせてくれましたよ」

「最後に来たのは、いつでしょうか？」

江藤は少し考える素振りを見せて

「……確か、九月三十日ですよ。僕の誕生日プレゼントを持って来てくれたんです」

江藤は少し席を離れ一つの帽子を持ってきた。

「その前に来た時に、僕が、愛用していた帽子を失くしたって話をしたら、誕生日プレゼントにこれくれたんです。彼女は毎年、僕

の誕生日にはプレゼントをくれていて、本当に良い子でした……。――

瑛子からの最後の誕生日プレゼントとなってしまうた帽子を手にした江藤の目から、堪えきれなくなった涙が流れた。

「……………沢村さんが、最後に来た日、何か彼女に変わった様子はありませんでしたか？」

「……………変わった、様子ですか。あつ、そう言えば、さようならって言ったんです。また来ますじゃなくて、さようならって」

「いつもは、また来ますと？」

「ええ。その日に限って、さようならだったんです。いつもと変わったところと言えば、それぐらいでしたかね」

いつもと違う去り際の挨拶。彼女の心境に何の変化があったのか。

外の雨は何時しか止んでいた。

第10話：似ている女

朝の内降っていた雨は気がつけば止んでいて午後からは晴れ間も覗き、夜には星が夜空を彩っていた。午後六時、探偵事務所から一度帰宅した新一は志保に仕事の関係で先日訪れたクラブ「蝶々」に行く事を告げた。志保には先日、新一が自分に何も言わずクラブに行った事、いくら話を聞かためとはいえ初めて会った女の家が上がった事などを説教され、その後の機嫌直しに新一は非常に苦労している。結果として、志保は許してくれたのだが、新一が次、また同じ過ちを繰り返せば今度こそとんでもない仕打ちがある事は目に見えている。新一もそれを十分に理解しているから、きちんと志保に「仕事で」という部分を強調して言っている。普段はクールを装っている志保だが、案外独占欲が強かったりするようだ。新一は珍しく玄関先まで見送ってくれた志保に、軽く口付けし米花駅に向け歩き出した。

米花駅から新宿駅までは一度乗り換えが必要で、新一がホーム上がった時にちょうど乗り換え列車が構内に進入してきた時であった。新宿駅に着いたのが午後六時五十分。駅から徒歩十五分程歩いて、新一は「蝶々」の看板を見つけた。前回来た時よりも一時間早い訪問だが、それも計算の内で、時間が早いとまだ客の数もまばら、それだけ手空きの人も多いし、話を聞くには絶好のチャンスであるのだ。扉を開けると、相変わらずの薄暗い照明で、店内には以前来た

時の賑わいはまだ無かった。どうやら新一の考えは当たっていたらしい。

ママは新一の顔を覚えていたらしく、笑顔で前と同じ席へと案内した。新一が席に腰を下ろしたちょうどその頃、奥の部屋から「春」こと平島春江が姿を見せ、新一を目敏く見つけると新一の相手をした。春江は新一に寄り添う様に座り、嬉しそうな顔を新一に向けた。

「また来て下さったんですね、嬉しい」

春江は新一から注文を聞くと、もう片方に座っていたホステスも余所へ追いやった。動揺する新一に春江は

「瑛子の事件のことで何か聞きに来たんでしょう？ だったら、二人きりの方が話しやすいわ」

水割りが運ばれて来て、軽く乾杯してから新一は話を切り出した。

「春江さん、奥井徹也さんって知ってるかな」

「ええ、奥井さんならうちの常連でしたわよ。それが何か？」

「沢村さんの、父親なんだよ。その人」

春江は信じられないという顔をしている。手で壁を作りながら「本当？」と聞いた。

「ああ、本当だよ。春江さん、知らなかったの？」

「ええ。瑛子のお父さんは見た事が無かったし、名前も初めて聞いた。」

たわ。あれ？ちょっと待って、それじゃあ、この間ニュースで言っていた瑛子の父親って、奥井さんのことだったのね……」

春江はまだ事態がうまく飲み込めていない様子だ。しかし新一はそれに構わず話を続けた。

「奥井さん、よくこの店に来てたって本当？」

「えっ、ええ。本当ですわよ。三日に一度は来てたんじゃないかしら。このお店値段が手軽だから、ああいう人がよく来るの」

「そこで、沢村さんと何か話したりとかはしてなかった？」

「してましたわよ。だって瑛子は、奥井さんのお気に入りだったんですもの」

今度は新一が驚いた。

「……じゃあ、奥井さんは自分の娘を口説いてたって訳？」

「ええ、そういう事になりますわね。もともと、瑛子が誘いを受けた事はありませんけど。瑛子の事はかなり気に入ってたみたいですよ。瑛子が行方不明になってからも何度か来てましたけど、居ないとわかると、今度は瑛子にそっくりな光さんに鞍替えしたぐらいですもの」

新一の視線は一人で数人の客を相手にしている「光」こと木本光子を捉えていた。

「あの人が、木本光子さん」

「あら、知ってますの？」

「……名前だけは聞いてるよ。本当に似てるね」

「ええ。見分け方を知らない人は、絶対に見間違えてしまいますから」

ふと光子が此方を向き新一と目があつた。光子は新一に軽く会釈をし、客の相手に戻った。ふと沢村瑛子の顔が脳裏をよぎった。

第11話：不可解な行動

午後十一時を幾らか廻った頃であろうか、「蝶々」の裏口から木本光子が姿を見せた。先程見た時とは違い私服で、随分地味な格好になった彼女はますます沢村瑛子に似ていた。

新一が後ろから声をかけると光子はあまり驚いた様子を見せず、「やっぱり」という表情をしていた。どうやら新一が店外で自分を待っている事を薄々予感していたらしい。聞けば彼女の家は杯戸町、新一は光子にお共の許可をとり同じ足取りの早さで新宿駅へと歩いていった。

「あつ、そうだ。まだ自己紹介してませんでしたね。私、工藤新一といいます。米花町で探偵事務所を経営しています」

光子は新一から差し出された名刺を受け取ると、自身もバッグから名刺を取り出し新一に差し出した。

「光です。あなたの事は春さんから色々聞いてますわ。瑛子さんの事件を調べてるんですってね」

「……………ええ、まあ」

「でも私、何も知りませんわよ。瑛子さんとはたまに仲間と連れ添って食事に行くぐらいで、二人で会った事は一度もありませんもの」

「しかし、自分の歯医者 の診察券を貸したんですよね？そこまで親しくないなら、そこまでしなくても」

「まあ、そう言われたらそうかもしれませんがね。ただ瑛子さんって、結構金銭的に煩い人で、私もそういう事を知ってましたから貸したんです。別に断る理由もなかったですしね」

「……しかし、本当によく似ていますね。あなたと瑛子さん」

急に話題が変わって光子は少し面食らっていた。

「世界には同じ顔を持つ人が三人居るっていうけど、まさにそのとおりかもしれませんわね。そうになると、後一人私達にそっくりな人が居る事になるけど……」

光子は考えて馬鹿らしくなったのか小さく笑い声を出した。

「春さんが言っていました。見分け方を知らない人は絶対に見間違えてしまうって。つまり、見分け方はあるんですよね」

「ええ、勿論。いくら顔が似ているからと言っても、全部が全部同じクローン人間じゃありませんもの。多少違うところはありますわ」

「……ホク口、瑛子さんには無かったですね」

確かに光子の鼻の左横には小さなホク口が見える。

「あと、見ただけじゃわかりにくいかもしれませんが、私と瑛子さんは利き腕が違います。私は左利き、瑛子さんは右利きですわ。見分け方としては、ホク口の方がわかりやすいでしょうね」

気がつけば新宿駅に着いていた。二人は隣り合った券売機でそれぞれ米花駅までと杯戸駅までの切符を買う。

その時新一は自身の視界に一瞬不可解なものが映り込んだ気がした。しかし、それが何なのかはわからない。

(……………何だ、今の変な感じ)

ホームの方から最終電車入線のアナウンスが聞こえてきた。

二人はホームへの階段を駆け上がった。

自宅に戻ると志保はまだ起きていた。新一は風呂に入り、湯上がりにお茶を飲もうと冷蔵庫を開ける。

「コップ、コップと」

茶箆笥の戸を開け左端にあったガラスコップを手に取ったその時、新一の頭の中にあの時の視界に映った不可解な映像が鮮明に蘇って来た。

「……………そうだ、あの時何であんな事を」

その不可解な事が事件と直接関係するものかどうかはわからない。しかし、あの時の出来事はいくら考えても不自然であった。普通の人ならあんな事はしないだろう。

何故、そんな事をしたのか。素ではなかったからか。探偵である自分の前で何かをごまかそうとしていて、あんな不自然な行動をとってしまったのだとしたら。

一体、何をごまかそうとしていたのか。

そもそも、この事は事件と関係しているのだろうか。それすらわからない。

新一はガラスコップの中の茶を飲み干し、部屋の電気を消してから志保が待つ寝室へと歩みを向けた。

第12話：まだ見えぬ真実

十月二十六日、この日午後七時過ぎに志保は新一の探偵事務所を訪れている。志保の勤める研究所は米花駅より三つ先の緑台駅に程近い場所であり、どうやら帰路途中に立ち寄ったらしかった。自宅にある車は主に新一が使用している為、彼女は電車通勤する事が殆どであり、そうなれば当然志保は、ほぼ毎日の様に探偵事務所の傍（米花駅）を通る事になるのだが、今まで志保が探偵事務所に顔を出したのは新一の記憶でもほんの数回。そのような理由からか、志保が事務所の扉を開いて中に居る新一と目が合った時、新一はかなり驚いた様子を見せていた。

「よう、どうした。珍しいな、お前が事務所に顔出すなんて」

「……別に。夕飯の買い物、付き合ってもらおうと思っただけよ。車があるから多少買い込んでも、問題ないでしょ？」

「成る程、そういう事か。じゃあちょっと待っていてくれよ、すぐ支度するから」

志保が買い物するのは決まって米花スーパーである。品揃えも豊富で、何より自宅から近い。

買い物カートを新一が押し志保が次々に食材を入れる。どうやら溜め置きするつもりらしくかなりの量だ。確かにこういう時ぐらいしか、こんな買い物方は出来ないだろう。

「あら、いらっしやい。お二人さん」

そう二人に声を掛けたのはこのスーパーの青果品売り場で働く土橋達子である。彼女は工藤邸の近くに住む、いわゆるご近所さんで新ーや志保とも面識が深い。

数年前に夫を亡くし、以来一人で生活しているらしいが、その寂しさを感じさせない様にいつも明るく振る舞っている姿が二人は好きだった。

「あっ、そうそう。実はね、この間うちのスーパーに泥棒が入ったのよ」

「ど、泥棒？」

「うん。夜中のうちにね、発砲スチロールがいくつか盗まれたらしいの」

「……発砲スチロールを、盗んだんですか」

「そうなのよ、変な泥棒でしょ？」

「それ以外は何も盗られてないんですか？」

「ええ、それだけなの。まあ発砲スチロールは空で、どうせ処分するやつだったみたいだから、手間が省けたって言ってたけどね」

確かに妙な泥棒だ。発砲スチロールを盗んで何に利用するつもりなのだろう。ゴミになるだけではないか。

「変な人って言えば、この間レジ打ちの人から聞いたんだけど、やたら大量に塩と水を買っていった人がいるらしいのよ。しかもその人、帽子被ってマスクして、サングラスかけて、めっちゃくちゃ怪し

「かつたみたい」

大量に購入された塩と水。

塩水

盗まれた発砲スチロール

新一の中にふと考えが浮かんだ。

「土橋さん、その発砲スチロールが盗まれた日と、塩と水を大量に買った人が現れたのって何時の事ですか？」

「えつと、確か二つとも十月の頭だったと思うけど。それが、どうかした？」

「……………工藤君？」

新一は考える。

（もし、今俺が考えた仮説が正しいなら、犯人が遺体をバラバラにした理由はわかった。だけど、そうなれば犯人の行動は益々不自然になってくる。何で犯人はあれをしなかったんだ……………）

犯人の行動がどうしても納得できない。暗闇の中に浮かぶ真実の光は、まだその姿を新一には見せてくれなかった。

第13話：見えた真実（前書き）

久しぶりの投稿になってしまいました。感想、評価お待ちしております

第13話：見えた真実

十月二十八日。季節は秋から冬へ、ゆつくりと、しかし確実にその歩みを進めていた。

午前七時、新一は自宅で恋人の志保と朝食を食べていた。白飯に豆腐の味噌汁、焼き魚に卵焼き。朝食のテーブルに並ぶ品々からは、眠気を一蹴する様な香ばしい香りが漂ってきていた。点いているテレビからは人気女子アナウンサーが読み上げる最新ニュースが聞こえてくる。新一が、ちょうどそちらに目を向けた時、いわゆる速報という形で入った事件の報道が行われていた。

「今朝五時頃、東京都杯戸町にあるアパートの一室で、男の人が死んでいるのが発見されました。亡くなっていたのは山岸一郎さん四十二歳、この部屋に住む無職の男性です。警察は殺人事件として捜査を進めています」

そのニュースをアナウンサーが読み上げる際に、被害者山岸一郎の顔写真がワイプで出されていたのだが新一はその顔に確かに見覚えがあった。

新一の頭の中に数日前のことがフラッシュバックしていく。

「あつ、そうだ。あの時の……………」

それは以前に、初めて新宿のスナック「蝶々」を訪れていた時の事。新一は店を出る時に、ちょうど来店して来た男の客と肩がぶつかったしまったのだが、その男こそ、今回殺害された山岸一郎であったのだ。

単なる偶然だろうか。しかし、スナック「蝶々」に絡む人がまた一

人殺されているこの状況を、単なる偶然の連鎖とは新一は到底考えられなかった。

「ちょっと行ってくる」

「行ってくるって、どこに」

「杯戸町だよ」

志保の呼びかけにも振り返らず新一は玄関の扉を開けた。

現場は新一の自宅から車で十五分程のところにあるアパートであった。随分古い造りらしく、壁のあちこちにひび割れが見られる。山岸の部屋は立ち入り禁止のテープが張られてある事からすぐにわかった。部屋の前まで行くと、中に高木を見つけ、新一は声をかけた。

「工藤君、どうしてここに」

「事件をテレビのニュースで聞いて、飛んできたんです」

事件発覚から既に二時間経過している。遺体は既に運び出され鑑識作業も終わっているらしく、高木は新一を部屋の中に入れてくれた。例によって桂川巡査だけは新一に対して露骨に嫌そうな目を向けている。新一はあくまでも民間人だ。事件と無関係である民間人を易々と事件現場に招き入れる高木に対して、桂川は少々苛立ちを覚え

ていた。そんな桂川を無視するかのようには高木は新一に事件の概要を話し始めていた。

「亡くなっていたのは山岸一郎さん四十二歳。この部屋に一人暮らししている人だ。詳しい死因は解剖してみないとわからないが、頭部に殴られた様な跡があり、更にあの灰皿に血が付いている事から、被害者はあの灰皿で頭部を殴打され死に至ったとみて間違いないと思うよ。発見者は、新聞配達の男性で、扉が開いたままになっていたから不審に思い中を覗いたところ、倒れている山岸さんを発見したそうだ。しかし、何故君がわざわざ？ ニュースで見て飛んできたって、何かあるのかい？」

「何かあるかどうかはまだわかりません。しかし、何かあるような気がするんです」

新一は例の事件捜査を自分がまだ進めている事はあえて言わなかった。警察は奥井徹也の遺体が発見され、更に遺書が見つかった時点で、捜査本部を縮小し、事実的な捜査終了を宣言している。いまさら警察に捜査を再開してくれと頼んでも門前払いを喰らうのは目に見えている。ならば自分独自に捜査を進めるしか方法はなかった。

「高木刑事、現場で何か不自然なところとかは無かったですか」

「不自然なところかい？」

高木はしばらく思索してから何かを思い出した様に「ああ」と声をあげた。

「そう言えば、妙なものを山岸は握っていたよ」

「妙なものの？」

「ああ。黒い小さな玉だったんだけどね。一応、警視庁に持って行ってんだけど、見るかい？」

警視庁に赴いた新一は鑑識課に行き、現場から押収された物を見せてもらった。

それはビービー弾程の小さな玉で、黒い色をしていた。それを見た時、新一の頭の中に小さな光が差した。

「……………これ、どこかで」

思い出すのにそう時間はかからなかった。そして、それを思い出した時、新一の中にまた新たな仮説が生まれる。その仮説が正しければあの時、自分が感じた不自然な行動も理解出来るし、この黒い玉の正体も明らかになる。更に尚も、その光は大きさを増していく。

（そうか、だから犯人は遺体に重石をつけなかったんだ。犯人は遺体を隠す為に海に捨てたんじゃなく、見つけてもらう為に）

この仮説を採用すれば事件の全容はほぼ明らかになる。しかしまだ仮説が正しいとは限らない。それを証明するには、もう一仕事するしかない。

「……………高木刑事、少しお願いがあるんですが」

高木は新一の自信に満ち満ちた顔を見て、思わず唾を飲んだ。

第14話：甦りし死者

十月二十九日午後十一時頃、新一はひとり新宿のスナック「蝶々」を訪れていた。店の前の通りの端に車を駐車させ、新一は車内でその人物の登場を待っている様子だ。今朝高木から入った連絡で新一は自分の推理がある程度正しい事を確信している。犯人が何故遺体をバラバラに切断したのか、何故遺体に重石を付けなかったのか、あの時の不自然な行動の意味は何なのか、あの黒玉の正体は何なのか、全ての謎は解明済みだ。犯行の動機については、大方予想はついているがまだ確証は無い。こればかりは本人に直接聞くしかなさそうだ。

店の裏手から二人の女性が見えた。新一はそれを見つけると、車の扉を開けゆつくりと車外に出た。

「あら、工藤さん」

二人のうちの一人「春」こと平島春江が素っ頓狂な声をあげた。

「今日もいらしたの？でも、もうカンバンですわよ？」

「いや、今日はちょっと話したい事があって来たんです」

「話したい事？私に？」

「いえ、あなたじゃなく。木本さんに」

新一の目は春江の横に居る木本光子を捉えていた。春江は困惑した様子を見せている。

「ごじやなんですから、車の中でどうですか。お宅までお送りしますよ」

「……………わかりました。何の話か知らないけど、お付き合います」
そう言うと光子は新一より先に車に乗り込んだ。助手席に腰を下ろしシートベルトを手早く装着している。

「それじゃあ春江さん、また」

しかし、新一がそう言うや否や春江は素早く後部座席に乗り込み、更に中からロックをかけ、出ないという意味表示を示した。確かに春江からすればつまらないことこのうえないだろう。新一が初めて「蝶々」に来た時相手をしたのが春江で、以来春江は新一に明らか
な好意を寄せている。春江は新一にちゃんと恋人が居るのも当然知
っているが、それでもあからさまなアプローチをしかけているのだ。
なるうことなら新一を奪ってしまおうとまで考えているかもしれない。
い。そこまで好意を寄せている相手が、あるうことか同じ店で働く
同僚に鞍替えするなど春江は断固許さないつもりらしく、ましてや
二人きりになどさせるつもりは毛頭無かった。現に昨日新一が「蝶
々」を訪れた時も、光子と話していた新一の横にべったり張り付き
光子に敵対心を剥き出しにしていたのをよく覚えている。

「お話なら、私も聞きますわ」

「えっ、でも、とても大事な話なんですけど」

「だったら尚更です。それとも、私に聞かれちゃまずいんですの？」

「……………わかりました。まあ春江さんには、色々話を聞かせてもらいましたし、まんざら無関係でもないですから、いいでしょう」

車をその場から動かさないらしいと判断した光子はシートベルトを外した。車内の緊迫した雰囲気には春江は思わず唾を飲み込んだ。

「話というのは、沢村瑛子さん殺害事件に端を発する、連続殺人事件についての事です」

「えっ、連続殺人って、瑛子を殺したのは、奥井さんなんですよ？奥井さん、まだ誰か殺してるの？」

春江が後部座席から身を乗り出して聞いた。

「いや、一連の事件の犯行は奥井さんによるものじゃありません。奥井さんは、真犯人に殺害されたんです。自殺に見せかけてね」

「ええっ!？」

一人で興奮する春江とは対照的に光子は平然としている。

「で、でも奥井さんの遺書が見つかったってニュースで……」

「それも犯人が用意したものだ。沢村瑛子さんを殺害したのが、奥井さんであると思わせる為だね。遺書はワープロ書きでした。しかし、奥井さんが普段手書きで小説を書いていたという事を知って、おかしいと思っただんです。小説を手書きで書く人間が、自らの遺書をワープロ書きにするというのは、不自然ですからね」

「……確かに」

「犯人が遺書をワープロ書きにした理由はただ一つ、筆跡鑑定をされない為。筆跡鑑定されれば、遺書が奥井さんのものではないと、すぐにバレてしまいますから」

「……でも、何でその犯人は瑛子を殺した罪を奥井さんになすりつけて、しかも自殺に見せかけて殺したのかしら」

「……これは僕の推測です、確証はありませんが、そこに今回の一連の事件の動機があるような気がします」

「動機？」

「ええ。恐らく犯人が本当に殺害したかったのは、奥井徹也さん一人だった。その他の殺人は、布石だったんです。つまり犯人は奥井徹也さんに、自分の娘殺しという、殺人者の汚名を着せ、この世から葬ったんですよ。そうする事によって、犯人自身が抱えている憎しみの気持ちを晴らすとしたのでしょ」

「ちよつ、ちよつと待って。もしあなたの言うとおりだとすれば、犯人は瑛子と奥井さんが実の親子だという事を知っていた筈だわ。」

だけど、あの二人からそんな話聞いた事ないし、だいいち、小学校の頃からの付き合いの私でさえあなたに言われるまで知らなかった事を、誰が知ってるって言うの？」

「……………確かに、あの二人が親子であるという事実を知る者はそうは居ないでしょう。僕も遺書を見るまでは知らなかった。だけど、居るじゃないですか。たった一人だけ、その事をずっと昔から知っている人が……………」

「……………ま、まさか」

春江の顔がどんどん青ざめてゆく。そう、それはまるで“死んだ筈の人間がすぐ目の前に現れた”そんな顔をしていた。

第15話：恐るべき計画

幽霊だとか妖怪だとか、所詮は人間の恐怖が生み出したまやかしに過ぎないはず。少なくとも春江はほんの一分前までそう信じていた。だがしかし、今日の前には、確かに死んだ筈の友人の姿がある。いや、それが沢村瑛子だとはついさっきまで夢にも思っていなかった。木本光子。友人によく似た女性。彼女は木本光子の筈だ。しかし新一の話は的を得ていると思う。春江は何が何なのかわからないこの状況に、ただ頭を悩ませるしかなかった。

「……まったく、恐ろしい殺人計画を考えたものですよ。まさに“死者の復讐”です」

「……死者の、復讐」

「本当の標的を殺害する為に、まず自らを殺す。その罪を標的に着せれば、自身に疑いがかかる事は無いし、憎き標的に殺人者のレッテルを貼り、葬り去ることができるといふ訳です。そうですね、沢村瑛子さん」

「………そ、そんな。だって、瑛子は……。じゃあ、あの東京湾から見つかった遺体は一体………」

「………木本光子さんですよ。あなたの殺人計画のなかで重要なのは、自身の代わりに遺体となって発見される人を用意する事と、自分の死亡ニュースが出た後、どのようにして身を隠すかという事。死んだ筈の人間が町を出歩いたりすれば、大騒ぎになりますからね。そこであなたが目を付けたのが、同僚である木本光子さんだ。春江

さんも知っているとおり、沢村瑛子さんと木本光子さんは、容姿が非常に似通っています。初対面の人などが見分ける事はまず不可能でしょう。あなたにとって都合だったのは、そこまで自分にそっくりな人間がすぐ側に居た事。木本さんを殺したあと、今度は自分が彼女になりすます事で、あなたはあの遺体が沢村瑛子であると思わせたんです。つまり、あなたの計画はこうだ」

春江は新一の言葉から頭の中にその状況を描こうとしている。

「まずあなたは、木本光子さんを何らかの方法で呼び出し殺害。ひとまずその遺体をどこかに隠しておいた。そして、その翌日、あなたは僕の探偵事務所を訪れた。探偵事務所であなは僕に、“誰かに命を狙われている気がする”と相談し、沢村瑛子という人物を殺害しようとしている人物が居ると印象づけた。そうする事で、沢村瑛子が行方不明になった時、彼女は殺されたのではないかという思いを警察や僕に抱かせたかったんだ。警察と繋がりがある僕の証言なら、警察も沢村瑛子さんが命を狙われていたのだと信用するだろうと見越してね」

春江はただ黙って、助手席に座る瑛子を見ていた。

「その後、僕と別れたあなたは隠しておいた木本さんの遺体を遺棄したんだ。しかし、あなたが遺体を遺棄したのはその日じゃない。沢村瑛子さんが行方不明になってから二週間後。遺体が見つかる、前日だ」

「えっ！？ちよつと待って工藤さん、私よくはわからないけど、この季節にそんな早く人間の遺体が骨になるものなの？」

「確かに、この季節人間の遺体が白骨化するのには一ヶ月程度かか

ります。しかし、例外があるんです」

「例外？」

「ええ。そこに遺棄すれば、例えば冬であろうと二週間程度で白骨化を進めることが出来るんです」

「……………その場所って」

「海ですよ」

「うみ？」

「そう、海。実は腐敗というのは海のように塩分が含まれている水の中だと急速に進むらしいんです。沢村さんは、それを利用したんですよ」

「だ、だけど。今遺体を遺棄したのは、瑛子が行方不明になってから二週間後だって言わなかった？もし、そのとおりだったら、見つかった遺体はまだ全然骨にはなっていないんじゃない？……………」

「それが出来るんですよ。ただ二週間放置しているだけで、遺体を白骨化させる方法が」

「……………放置しているだけで」

「ええ。数個の発砲スチロールと、塩と水があればね」

「……………どついついごと？」

「まず瑛子さんは、発砲スチロールを近くのスーパーから盗み出し、更に大量の塩と水を購入する。そして発砲スチロールの中に、塩と水を入れ海水を作ったんですよ。こうすれば、海に捨てなくても遺体を白骨化させる事は可能だ」

「……で、でも、発砲スチロールに人間の体は入らないんじゃない？」

「だから、バラバラにしたんですよ。発砲スチロールに入るように恐らく、僕と別れた後隠しておいた遺体をどこか別の場所へ運び、遺体を切断してから塩水が入った発砲スチロールに入れたんですよ。遺体の切断作業は、何か道具を使っただんじゃありませんか？女性の力じゃ、難しいですからね」

春江は遺体をバラバラに切断する作業をつい頭に思い描いてしまった。チェーンソーの音が鳴り響き、辺りに鮮血が飛び散る。春江は途端に軽い吐き気に襲われた。

「……で、でも。なんでわざわざそんな方法で。普通に海に捨てればいいのに」

「……沢村さんが遺体を遺棄したのは、遺体を隠す為じゃありません。見つけてもらう為です」

「み、見つけてもらう為？」

「ええ。もし、春江さんの言うとおり殺害してすぐに遺体を海に遺棄すれば、白骨化する前に誰かに発見される可能性があります。そうなれば彼女の計画はパーになるし、かといって遺体が入った袋に重石をつけて沈めたりすれば、何時まで経っても遺体が見つからない可能性がある。そうなれば計画は先へ進まない。この計画は、ま

ず木本光子さんの遺体が発見され、尚且つその遺体が沢村瑛子さんだと断定される事がスタートの大前提なんです。だから、自ら遺体を白骨化させ、見つけやすい様に重石をつけず遺体に入ったゴミ袋を遺棄した。計画通り、遺体は翌日、釣りに来ていた人が発見しましたよ」

春江は黙ったままの瑛子を見つめる。新一の推理が間違っているなら反論してほしいが、それすらしようとしなない。全ての感情を押し殺してただ話に聞き入っている様子だ。

「遺体が発見されて、あなたは遅かれ早かれ、木本光子に変装した自分のもとに警察が来る事も予測していたでしょう。だから刑事の来訪を受けた時も、慌てる事は無かった筈だ。警察は当初、行方不明になった日と遺体の死後推定日時から遺体が沢村瑛子さんではないかと考えています。そこに僕の証言もあって、いよいよ遺体は沢村さんの可能性が強くなったんです。警察はその確証を得る為、歯の治療痕と一致する診療者を見つけだします。しかし、そのカルテにあった名前は木本光子。当然です、遺体は木本光子さんなのだし、そのカルテも間違いなく木本光子さんのものですからね。しかしあなた、自身の証言でその謎を解かせたんです」

「……証言？」

「診察券を、沢村瑛子さんに貸した。だからそのカルテは自分ではなく、沢村瑛子さんの治療カルテである。そう証言すれば、警察は遺体を沢村瑛子さんだと断定するでしょう。ましてや、僕の証言などから七割、いや八割方、遺体が沢村さんではないかという考えが警察にはあつた筈ですからね」

「……瑛子」

しばしの沈黙が車内に流れる。大きく溜め息をついたかと思うと、
沢村瑛子は静かに口を開いた。

「……失敗だったわね、あなたを証言者に選んだのは」

その顔は、とても三人もの人間を殺害した凶悪犯とは思えぬ程穏やかで、優しいものであった。

第16話：最後の道

全てを認めた。その瞬間新一は緊張を解いた様に大きく息を吐いた。ハンドルへ前かがみになっていた姿勢から、背もたれに全体重を預ける姿勢になる。小さく座席が鳴った。

後部座席に座る春江は暫くの間ただ黙って瑛子を見ていたが、顔だけを後ろに振り向かせた瑛子に「ごめんね」と言われて、ストツパーが外れた様に涙が溢れ、シートにこぼれ落ちていた。

「工藤さん。送ってくれる？警察まで」

「……………ええ、お送りしますよ」

新一と瑛子はシートベルトを締めた。エンジンをかけ、新一がアクセルをゆっくりと踏み出す。一番近い警察署までは十五分程。間もなく事件は終わる。最後の道を、今ゆっくりと走り始めた。

「……………何時から、私が木本光子じゃないって思い始めたの？」

瑛子は外の景色を眺めながら聞いた。窓外にある町は、間もなく日付が変わろうとしている時間帯だから、あまり人気はない。

「……………最初に不審に思ったのは、木本光子さんに変装したあなたと

初めて会話した時です。あの時、駅で切符を買っていたあなたの行動を見て、僕はあなたの不可解な行動に気がつきました」

「……………何？」

「あなたは、あの時右端にあるボタンを押すのに、わざわざ遠い方の左手を使いました。それが引つ掛かったんです。普通ああいう場合には近い方の手を使います。にもかかわらず、あなたは遠い方の左手でボタンを押した。何故、そんな事をしたのか。そのヒントはあなたと木本光子さんとの相違点にあります」

「……………利き腕？」

「ええ。あなたは右利き、木本さんは左利きだ。当然木本さんに変装していたあなたは、その間人前では左利きを演じなければならなかった。ましてやあの日は、探偵である僕が傍に居るということで、余計に神経質になってしまったんじゃないやありませんか？だから左利きを演じる事を過剰に意識してしまい、あんな不自然な行動をとってしまった。もし、あなたがあの時僕の事を何も意識せず自然体で居れば、あなたはこんなミスを犯さなかったでしょう。しかし、利き腕の逆の手を使って、周囲から全く不審がられることが無かったのは、それ程までにああなたの演技は完璧だったという事。それは素直に凄いなと思いますよ」

すると瑛子は小さく笑った。

「凄いななんて、何も無いわよ。左利きとして生活するのに、大して苦労は無かったわ」

「……………しかし、利き腕と逆の手を使うのは、かなり難しいと思いま

すけど」

「逆じゃないのよ。私の場合」

「逆じゃ、ない？」

「ほら、昔はよく居たでしょ？親に利き腕を矯正される子供。私もその一人なのよ」

「じゃあ、あなた元々左利きだったんですか……………」

「ええ。小学校に入る前に、母親に右利きに矯正されたわ。まあ、おかげで両利きになれたけど」

流石に新一もそれには気付かなかった。両利きというのは非常に珍しいし、新一自身初めて見る。春江もどうやら知らなかった様子だ。

「で、話は戻るけど。私に変装してるってわかったのは、何故？」

ちょうど赤信号に変わり、車は停車する。周囲には車は見当たらない。

「今話した、不審な行動に関して、当初はこれが事件にどういう関わりを持つてくるのかわかりませんでした。でも、山岸さんの事件の時に見つかったある物が、あなたが沢村瑛子さんなのではないかという仮説を生み出させてくれたんです」

「……………ある物」

新一は瑛子の顔に手を伸ばす。反射的に瑛子は一瞬身を引くが新一

はすぐに手を引いた。その手には黒い小さな玉が握られている。

「山岸さんの遺体は、これと同じようなものを握っていました。あなたの付け黒子と、同じものを」

それは瑛子と光子のもう一つの相違点である。山岸が握っていた物を見た時、新一は光子の顔にあつた黒子を思い出し、自分が会つた木本光子は沢村瑛子の変装なのではないかという仮説を立てるに至つたのだ。更にその後、新一は高木に一つの依頼している。

「僕の知り合いの刑事にある依頼をしていました。DNA鑑定という言葉、聞いたことありませんか？」

「……テレビドラマとかで、何度か」

「実は、昨日僕がお店に行つたのには訳があるんです」

「訳？」

「ええ。あなたの髪の毛を、採取するためです。そして、その採取した髪の毛と、あなたが以前暮らしていた杯戸ハイツから採取された沢村瑛子さんの髪の毛とを照合分析してもらつた結果、二つのDNAは完全に一致したという事でした。この事から、今生きている木本光子は沢村瑛子の変装であると断定出来たんです」

「……決定的証拠ってやつね。どうりで昨日は私にベツタリだった訳だ」

車は交差点を右折し、警察署前の道に入った。あと十分足らずで警察署に到着する。

最後の道も、終わりを迎えようとしていた。

「……ねえ、瑛子。どうして？どうして人殺しなんてしたの？瑛子は、そんな事する子じゃなかったのに」

春江が涙声で聞いた。自分の大切な友人が殺人という犯罪を犯した現実を、彼女は未だに受け入れられずにいる様子だ。

「……さっき工藤さんが言ってたけど、私が本当に殺したかったのは奥井徹也だけよ。光子さんはともかく、山岸さんの事件は予定外だったわ」

「……予定外？」

「ええ。私が山岸さんを殺したのは、彼が私を脅迫してきたから。気づかれたのよ、私が光子さんの変装をした沢村瑛子だって」

「どうしてバレたの？」

「あの人、光子さんのお客さんだったでしょう？あの日も、店の営業が終わった後にホテルへ誘われたわ。私が拒んだら、あの人いきなり襲いかかって来て、抵抗してもみ合ってる時に付け黒子が取れちゃってね。その場は逃げたんだけど、後日お店で言われたの。“あんだ、沢村瑛子だろ”って。そしたら山岸は、黙っててやるから

「一千万円用意しろって言うてきたの。なんか借金が色々あったみたいだね。私、考えたわ。お金を払っても山岸が口外しない保証は無いし、あんな奴の為に一千万円用意するのも馬鹿らしかった」

「……………それで、殺したの？」

「ええ。金を用意したから渡したいって言うたら自宅に呼び出されてね。そこで殺したわ。まあ、まさかあいつが私が落とした付け黒子をまだ持ってたとは思わなかったけど」

足を引つ張られたわ。と微笑を浮かべる瑛子。

「奥井さんは？お父さんなんですよ？」

「ええ。残念ながら、あいつは私の父よ」

「……………残念ながらって」

「……………あんな奴を、私は父親だなんて思いたくないわ。私とお母さんの人生を滅茶苦茶にした、あんな男を……………」

「……………あなたのお母さんが自殺した事と、関係があるのでは？」

しばらく黙っていた新一が口を開いた。

「……………ええ。あの男のせいで、お母さんは死んだの」

少し先に警察署の姿が見えた。カウントダウンが始まった。

「……私の両親が離婚したのは、私が小学校四年生の時。原因は父親の家庭内暴力だった。仕事もしないで、小説家の真似事なんかして、私もお母さんもあんな奴とは一緒に居られなかった。だけど、あの男は離婚してからも母にまとわりついてたわ。母はそれから逃れる為に、お金を渡したりしていたみたい。母が必死の思いで稼いだお金を、あの男は容赦なく持って行って、母はだんだん精神的に追い詰められていった。そして、私が小学五年生のある日、学校から帰って来たら母が、首を吊っていたの……」

瑛子の目にうつすらと涙が浮かぶ。

「……何がなんだかわからなかった。何でお母さんが死ななきゃいけないのか、何で私がこんな思いをしなきゃいけないのか。全部あいつのせいだ。その時私の中に、父親に対する憎しみの炎が燃え上がったの」

「……しかし、その炎も、何時しか消えかかるまでに小さくなった。あなたが育った施設の人や、春江さんの様な友人のお陰で」

「ええ。私の周りの人は、皆いい人ばかりで、日に日に私の中の憎しみの気持ちは薄れていったわ。あの店に、あの男が現れるまでは……」

「……奥井さんが、お店に来て、相手をしたのは瑛子だったわよね」

「ええ。すぐに気づいたわ、父親だとね。だけど、あいつは私には全く気付かなかった。それどころか、私の事を口説き始めたのよ。」

昔と何一つ変わっていない、こんな男のせいで母は自らの命を絶たねばならなかったのかと思うと、消えかけていた炎が一気に再燃して、私の心を炎で一杯にしたわ。その時、私は決意したの。この男に、娘殺しという汚名を着せあの世に葬ってやろうとね。あとは、あなたの言うとおりよ、工藤さん」

車が静かに停車した。警察署がすぐ目の前にある。

「……中まで、ご一緒しましょうか？」

「……ありがとうございます。でも、大丈夫ですから」

瑛子は柔らかい笑顔を二人に見せる。

「……瑛子」

「……春江。春江や施設の人に心配かけたことは、今回私が、唯一後悔していることだから、ちゃんと謝つとくわ。本当にごめんね、心配かけて。だけど、春江が友達で良かった。春江が居なかったら、私きつと、お母さんの後を追ってたと思うから」

「……瑛子」

春江は瑛子に抱きついた。瑛子もそれをしっかりと受け止める。こぼれ落ちそうな涙を必死に堪えながら瑛子は、春江をきつく抱き締め小さな声で「ありがとうございます」と言った。

ゆっくりとした足取りで警察署の玄関へと歩き出す瑛子。

「……………終わりましたね」

カウントダウンが終わり、事件は今終わりを迎えた。

エピソード（前書き）

完結です。ありがとうございました

エピソード

沢村瑛子の自首は警察だけでなく世間をも驚かせた。金に目がくらんだ父親に殺害された筈の娘が実は生きていて、しかも一連の殺人事件の首謀者であるという真実に、世間は何やら裏切られた思いをそれぞれに抱いていた。

テレビの報道番組では何故犯人である沢村瑛子が、自首に至ったのかなどの議論が交わされ、逃げ切れないと観念したからとか、罪の重さに耐えかねてとか様々な憶測が飛び交ったが、そこから事実が語られる事は遂に無かった。

警視庁の発表では、警視庁は沢村瑛子の自首以前に事件の全容を解明し、彼女が出頭した際には既に逮捕状を請求しようとしていた矢先だったとしている。確かに全くのデタラメではない。実際警視庁は、沢村瑛子出頭以前に事件の全容を解明しているし、逮捕状請求の矢先だったことも事実だ。しかし、その会見の際に警視庁幹部から工藤新一の名前が出る事は無かった。警視庁が事件の全容を知ったのは工藤新一からそれを聞いた高木渉によるもの。その為警視庁は、事件解決の功労者である工藤新一を表彰したいと言っていたのだが、彼が自身の名前を出す事をNGとした為仕方なく工藤新一の名前は会見では出さなかつたのである。警視庁内部に居る以前から新一のことを知る人物は皆、異口同音に新一は随分謙虚になつたと発していた。

「いいんですか？警部」

桂川巡査部長が高木に聞いた。

「何がですか？」

「工藤探偵のこと、言わなくて」

「仕方ないですよ。本人が自分が関わったことを伏せておいてくれるって言うんですから」

高木は納得している様だが、桂川は違うようだ。

「……何で、そんなに謙虚なんですかね。テレビとかに出れば、依頼人ももっと増えるだろうし。ちよつと私には理解出来ません」

「……人は、変わるものですよ」

そう言った高木の顔は何故か辛そうに見えた。

一週間後、新一は久々の休日を恋人の志保と共に過ごしていた。杯戸ショッピングモールで買い物をして、昼食の為に美味しいと評判の Pasta 屋に入った。

「で？例の事件の容疑者、どうなったの？」

料理を待つ間志保が周りに聞こえない程度の声で聞いた。

「ああ、事情聴取も素直に受けてるみてえだし、心配ねえよ」

「……そう。だけど、今回の犯人にはちよつと同情するところもある

わね。私も同じ立場だったら、同じ事をしてたかもしれないわ」

「……………同情なんてすべきじゃないさ。どんな理由があろうと、犯罪を正当化する事は出来ないんだから。彼女の事だつて、本当に殺人を犯すしか憎しみを晴らす方法がなかったのかつて俺は思う。もっと別の解決策があつたんじゃないかつて、そう思うんだよ」

「……………相手への憎しみを募るに募らせた人が、それを見つけるのは、かなり難しいでしょうけどね」

何か言おうとして新一はコップの水を一口飲んだ。今はデート中、これ以上事件の話は必要ない。新一は次に出そうな言葉をその水で奥へと追いやっていた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2108q/>

死者の復讐

2011年2月26日00時43分発行